

昔の日本のことを調べ研究する学問は、  
現代を改めて見詰め直すことにつながる。  
そして、自分自身にある何かを  
捉え直すことにつながる。

一見、古くさい（人々の日常生活や文化の歴史を、民間伝承を通じて研究する）民俗学的な事象も、過去を扱っているように見える歴史的な事象も、それがあるからこそ現在がある。

岩田先生が研究の核心に据えているのがこの考え方だ。それは、結局は皆さん自身の存在や行動様式を改めて捉え直す機会にもなる。

民俗学や歴史学の研究者としてだけでなく、広く科学全般の在り方から、やがて社会人となる皆さんの生き方にも結びつく、岩田先生独自の研究の世界にぜひ出合ってください。

過去から現在を、そして  
現在の自分を見つめる

「日本社会文化論Ⅰ」の授業で、岩田先生はほぼ毎回、出席カードを兼ねたリアクシヨンペーパーを配る。そこには例えば「昨日の夕飯に何を食べましたか？」という毎日の生活についての身近な質問が付けられる。回答を集計すると80%が白米を食べているのだが、実は日本人が白米を食べるようになったのはここ数十年のことなのだ。1930年〜40年にかけての調査記録では、米にヒエやアワを混ぜた混合食を食べて

いたことが分かる。白米は少し前まではお祭りの日に限られており、戦後豊かになるにつれて白米100%が実現されていく。こんな主食についてだけを見ても、現在は過去の積み重ねのうえにあることが分かる。白米に関する回答は「食文化」の講義につながり、「神社・寺院でお賽銭を投げますか？」という100%が肯定した質問は「儀礼論」の話と関連してくる。

「ごく普通の生活様式が、民俗学の重要な鍵とつながるケースが多い。このアンケートは、学生自身の生活のなかに日本の社会文化が内在して

いることを自覚してもらうために行いました。

同時にこれは、将来、社会人として仕事をしようになったときに、どんな職業であれ、扱う対象が自分の生活と密接につながっていること、連続性があることを肌で実感してもらおう目的もあります。そして自分自身の行動様式や考え方を知らずきっかけにしてほしいのです。社会的に有用な人材となるためには、まずおのれを知ることが大切です。それがないと、いくら『世のため人のため』と思っても、傲慢不遜になる可能性が高いように思います」

岩田先生のこの思いは、研究対象への向き合い方を通して、研究者として学者としての覚悟にもつながっていく。

「研究であれ仕事の対象であれ、人間不在、自己不在になってはならず、一人歩きしてはならないと思っています。対象が人間と乖離し、一人歩きましたときに、人類自体を破滅させたり、人間疎外をもたらしてしまう科学技術や兵器、組織や社会を生み出していくのです。だからこそ、常に人間不在にならない授業をしたいと思っています」

確かに皆さんにとって教科書の内



## 岩田 重則 (いわたしげのり)

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程史学（日本史）専攻単位取得退学、博士（社会学／慶應義塾大学社会学研究科）。東京学芸大学教育学部教授などを経て、2013年4月より中央大学総合政策学部教授。

専門は歴史学／民俗学（日本）。著書に『戦死者靈魂のゆくえ』『「お墓」の誕生』『いのちをめぐる近代史』『宮本常一』『天皇墓の政治民俗史』『日本鎮魂考』などがある。

容は、自分とは関係のない単に暗記する対象でしかなかっただろう。岩田先生は、皆さんを含めた現代に生きる人々に、もう一度、自分自身の内にある日本の社会文化を、そして自分自身を見つめ直しなさい、と言っているかのようだ。

## 研究室外で調査する フィールドワークの重要性

岩田先生が研究において大切にしている方法に、フィールドワーク（研究室外で行う現地調査・研究）がある。

「もちろん文献などから知識を吸収・分析するデスクワークは大切です。しかし、もう一つ、フィールドワークと組み合わせさせて対象に迫るのが理想的です。

初年度は、群馬県上野村で行いました。なるべく繰り返し行きやすい都内から100km圏内に設定しています。山村で継承されてきた生活様式についての民俗学的調査と、「過疎化・高齢化のなかで共同生活の維持が難しくなった」限界集落」に近い現代山村調査を主なテーマとしました。上野村には、五穀豊穡と無病息災を願って獅子舞を奉納する文化があるのですが、そのような土地に伝わる文化について担当別に事前学習を積み重ね、インタビューと観察を主な手法として対象にアプローチします。事前に調査依頼し、各家庭には趣旨を回覧してもらってお話いただく方は選んでいただいているのですが、多くの学生ははじめての体験でインタビュー技術はありません。質問項目は用意しますが、質疑応答は予定した通り進むわけでもあ



民俗学の書籍も多数ある。しかし、岩田先生の研究にはフィールドワークが必須だ。

りません。そこでは予想外の展開への臨機応変の対応も求められますが、ただ『こんなことが知りたい』という熱意が伝われば相手の方は、意外に親切に答えてくれるものです。

フィールドワークの場合も、最初に対象となる上野村の生活は自分とは違うもの、という認識になりがちなのですが、繰り返し訊くうちに交流が生まれ、逆に質問されることも



ゼミも講義も、岩田先生自身の研究にはあまりふれない。それが、学生の自由な発想を促していく。



ゼミでは、自分が関心のあるテーマを取り上げるが、“自分の色”をいかに出すかが大切になる。

あります。そうした経験のなかで他者を理解し、やがて同じ現代を生きる人間として、自分たちとの共通点を見つけて、自分自身を見つめる機会を得ることもできます。単に調査対象から成果を得る、という目的のみに心を奪われるのではなく、そうした相互の交流こそ自分にとって大切な経験になるのです。調査内容は最終的にレポートとしてまとめ、もちろん上野村の皆さんにも届ける予定です」

## 自分の色を 研究で発揮してほしい

フィールドワークについては岩田先生が地域を決め、事前に調査地域への周知徹底を図る「設営」を行う。しかし、講義において先生には「自分の枠にはめない」という指針がある。したがって、自らの研究成果を話す、という機会もあえてあまり設けないのだそうだ。  
「こちらからテーマを与えると、何

かをつくりあげても本当に自分のものになりません。また、私の研究を前面に出すと、知らず知らずのうちに思想的影響力を与えてしまう可能性があるので、それも避けていきます。それが『自分の枠にはめない』理由なのですが、だからこそ『自分の色を出してほしい』という願いをもっています」

「基礎演習Ⅰ」の演習も「君たちが学んでみたい対象は何ですか？」という質問からスタート。敗戦時の日本の状況に興味があるという意見から、当時の内大臣であった木戸幸一について学ぶことに決定したとか。「学生の色を出す」という指針は、もちろん岩田先生のゼミの進行も同じだ。初年度に学生が選んだテーマは「妖怪研究」「食文化」「幕末維新期の水戸学」「化粧」とまさに幅広く、多彩。文献の読み方やプレゼンテーションなどの基本ノウハウをレクチャーし、先人の仕事をしっかりと把握し研究成果の整理ができるノウハウを把握した後は、まずそれぞれのグループごとに、自由な発表から

進めていく。

「後期からは、それぞれのテーマに沿って、資料の扱い方やフィールドワークからの資料作成の方法などをより濃い密度で学んでいきます」

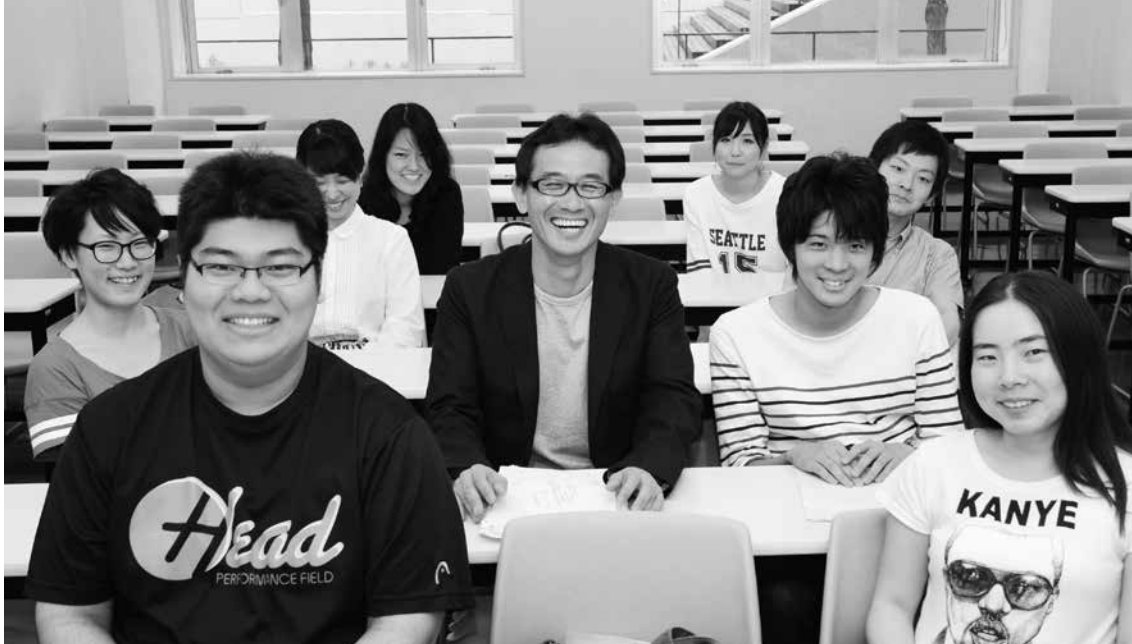
「自分の色」を研究を通して学問の領域にまで高める、そんな夢が現実になるはずだ。

## 多様な関心のなかで 旺盛な研究活動を進める

フィールドワークを重んじる岩田先生は、自身の研究ではさらに軽快なネットワークを見せる。

例えば水曜日の昼間仕事を済ませ、夜に都内から夜行バスに乗り込んで三重県内の山村に入り、翌朝から2日間みっちり現地調査をする。帰りの金曜日は再び夜行バスか、あるいは新幹線を使ってその日の夜に帰る。こんな強行スケジュールを現在も実践されているのだが、自らが知りたいことを求めるその旺盛な意欲には驚かされる。





一人ひとり研究テーマは異なる。そして、ゴールはまだ見えない。岩田先生は、ゴールテープを切るまで助言を欠かさない。

## 高校生の皆さんへ

岩田先生のメッセージは、学び方や講義の在り方から十分に感じとれるが、改めて訊ねてみた。

「実験室とか教科書から自分が学びたいテーマを見つけているのではなく、あくまで自分の生の体験から見出してほしいですね。そうでないと、やはり研究対象が客体化してしまい、自分とは離れた存在になってしまいます。」

フィールドワークに、「相互往復運動」とも言うべきコミュニケーションが生まれるのは楽しいですし、相手の方との交流を通して自分も成長する実感があります。例えば、皆さんが自由に「自分の色」を出すことで、私が新しい世界と出合うこともあるのです。

自分自身の現在の生活や体験、いま行っている実践を自覚的に捉え直し、興味をもったテーマを広げながら大学生活を送ってください。そして、その後のよりよい人生に結び付けていってほしいと思います。

フィールドワーク同様、事前に調査依頼を行い了解を得たうえで実施していると思うのですが、岩田先生は、事前の連絡なしにいきなり訪ねることも多い。それを先生は「流す」と呼ぶ。

「もちろん玄関先で断られる場合もありますが、意外に快く迎えられることなく20分〜30分は話してくれまして、雨天のときに傘をさしながら墓地まで案内してくれることもあります。何かを調べたいという気持ち

が通じると、それを理解して応じてくれる風土が、日本にはあります」

このように行動的なフィールドワークの模様には、まさに飽くなき探究心があふれている。そして「欲張りかもしれませんが、いつも複数

のテーマが走っています」と笑う岩田先生の表情からは、民俗学・歴史学の楽しさが十分に伝わります。

民俗学や歴史学の分野で研究してみたい分野があれば、岩田先生のもとで確実にステップアップできる。そんな思いを抱かせてくれる可能性がそこに広がる。

岩田先生は、アジア太平洋戦争と神々の問題から「お盆」の研究まで実に幅広いが、その中にお墓や葬送儀礼についてのテーマがある。お墓についての著書は既に出版されているが、「再度、関心が呼び覚まされています」と語る。

私たちがいま常識と考える、あの「先祖代々の墓」と刻まれた直方体の墓石は、中世には見られない。伝統的な墓の形態と思われるのが、実は江戸末期から明治・大正にかけて形成されてきた、いわば新しい形態なのだという。こうした変遷の背景に岩田先生は、仏教が浸透していく過程との関連を見るが、それはまさにフィールドワークを通して現在、調査しているところだ。

土地のお墓について家々を訪ねてお話を聞く。そのシーンを想像すると、ゼミで行う